

わだっぺいちじるしく、ときにきわめて有効適切であるこの学問は、ときとして、實際家の役に立つ道具の役だけに終始し、万人に奉仕すべき科学者の範疇外の仕事におわれる危険をもつ。いっぽうにおいて、理論的な研究の深さが要求されると共に、他方において、實際的な仕事の体験がとりわけ要請される。前者についていえば、サイバネティクス、数理計画法にみられるように、数理の高度化は不可避であらうし、後者についていえば、実査にも、分析にも、具体的な研究体験をできるだけ積むことが、統計学者としてはぜひ必要である。自分自身を顧みるとき、教授などという地位に安住するのもおこがましく、もっと一意専心勉強する余暇がほしくてたまらないのである。自分の力はしかし限られている。統計科学の一翼としてのサイバネティクスだけでも、これからの一生をささげてもなおたりないことである。

私が漠然としてしか予感できなかったものは何であろうか。現代社会の科学的・技術的な基盤、そういうものを今となってははっきり自覚して進むべきであると思っている。

わが歩み

(一)

わたくしは明治四十二年十月、小樽に生まれ、中学四年修了までずっと、そこで育った道産子で

ある。しんぼう強く、根気もよいが、おとなしすぎる、小回りに才智の働かぬこの子は、とても実業には向くまい、学問でも身につけるほかはあるまいと、父は思ったことであろう。

小学生のころは、習字塾と受験塾へ通わされ、中学生となると、英語と数学とは、特別に先生の御宅へ通って習わされた。田舎の中学であったけれども、児林、神林、石崎の三先生の教えてくださった数学の厳しさと美しさとは、少年の心をいつしかすっかりつかんでしまった。英語の田尾一先生（のち東京芸術大学教授）からも、ツルゲネーフ、トルストイなどロシア文学のほかに、数学へのあこがれをふきこまれた。

小樽のような港町に生まれ、暗くさびしい海を見ながら暮らし、冬ともなれば、鉛色の空のもとで雪に埋もれる日々ではあったが、あおぐ夜空にはときに美しい星もある。もしも、自分が異郷へ行って、学問の道へでも進むことができたなら、貧しくとも美しい世界で生きて行けるかも知れない。わたくしは、いまでも大正十五年四月仙台の第二高等学校理科へ入学を許可されたときの感激を思い出す。それは、大事に子供心に秘めたそうした悲願があったからである。

だが、いったい学問とは何であろうか。それよりもまず、自分とは何であろうか。高校生のわたくしは、そこから自分で考えてみなければならなかった。阿部次郎、西田幾多郎、田辺元等々の求道の姿を著述を通じて知り、それらの著述もくりかえし精読し、カント学派の哲学などもたずね求めてみた。これはあえてわたくしだけのことではない。一年上級の理科生で親友であった荒川秀俊

君(のち氣象研究所長)にしても、同じような傾向であった。高校三年生のときには、道交寮という第二高等学校の仏教の寮に入れてもらい、歎異鈔を毎朝交代で読経した。白川勇記(金屬学)、槇哲夫(外科学)、豊原恒男(心理学)の諸君も同寮であった。このような精神的な遍歴を、懷疑と低迷との中につづけたのが、杜の都の三年の生活であった。その最後になって、大学では何学部にするか、何を専攻にするか、将来の志望を決定しなければならぬ時機がきた。医学へという父の切なる希望、哲学こそと思う内心の欲求、これらがうずまく自分自身の気持は、はてしない混迷をつづけるばかりであった。結局はルビコンを渡るような気持で選んだのが数学である。とくに数学的な才能があるとは少しも思わなかった。昭和四年四月、東京帝国大学理学部数学科の学生となった。

入学してみると、同級生の多くは、朝から夜まで、ただ一心に数学だけ考えていれば、それで満足できるようなかたばかりである。大学程度の数学もすでに高校時代に相当勉強してきたかたが多い。小松醇郎(京大)、遠山啓(東工大)、浅野啓三(阪市大)らの諸君が同窓である。

数学科の学生になって見ると、第二高等学校の三年間、あまりのんきに道草を食いすぎたような気がしてきた。父の衷心の期待において、数学にこそろざした責任もあった。自分自身を錬えて数学者という鑄型につくりあげなければならぬ。数学の思考技術も計算技術も、鍛練して会得しなければならぬ。このためには、ひたすら数学の世界に没入し、ここに沈潜するほかはない。いっさいの哲学書、いっさいの文学書は、箱づめにして郷里へ送りかえした。

当然のなりゆきとはいえ、当のわたくしには、初めはかなりつらい苦しいことであつたし、人生の進路をあやまったのではなかつたかと後悔するときさえあつた。しかし、わたくしの前には、数学者はどういうものか、現実像がある。これを手本として、自分を形成してゆくこと、いずれの業もおよびがたい自分には、それがもはや不転の道であるとも感じた。

当時、東京大学数学科には、教授に高木貞治、坂井英太郎、吉江琢兎、中川銓吉、竹内端三の五先生、助教授に辻正次、末綱恕一の二先生、さらに唯一の助手として清水辰次郎先生がおられた。

二十世紀数学の不朽の記念碑の一つといわれる類体論を創られた高木先生の講義は、数学とはどういうものかを、どういう態度で学ぶべきかを、代数学および整数論の講義の中で教えてくださった。

これが、数学への開眼であつた。不抜の論理主義、一点の曇りも許さぬ透徹、それが数学の世界である。もちろんそれは哲学には見られないし、また多くの科学に共通しているわけでもない。安心して帰依することのできる真理の世界、そして厳しく美しい永劫の殿堂、数学をこのように見るようになって、わたくしも純粹数学の鍛練を次第にむしろ楽しく思うようになってきた。

比較的健康に恵まれているわたくしであるが、大学卒業近くになってから一年間を軽かったが胸を患って静養した。湘南サナトリウムの八十日、郷里での三カ月の保養。わたくしはこのときアララギ派の歌を病床で愛読し、とくに島木赤彦、斎藤茂吉に傾倒した。

すらすらと卒業もできず、身体までこわしたわたくし。孤独と失意とを慰めてくれたのは、ときに数学であり、ときに詩歌であった。

自己を鍛えて全心を一点に集中し、これを疑視して、実相を観入しようとする短歌の写生の世界は、わたくしにとって悲しいときの慰安だけではなかった。のちになってわたくしの学問の道にも深く影響したのである。このことは、わたくしがのちに述べるように統計学に志すようになってから数年たって、ようやく、自覚するようになった。

(11)

昭和九年三月東京大学を卒業して新設の大阪大学理学部に助手として迎えられた私は、自由活発な大阪大学の雰囲気のおかげで、楽しい研究生活に没頭することになった。わたくしは、東京大学では微分方程式論の権威であった吉江琢児教授の門下であるが、同門の先輩南雲道夫教授のもとで働くことになった。そして同教授の提示された関数方程式の未解決のある問題に、やがて真正面から全力をあげて取り組むことになった。わたくしの東京大学在学当時、東京大学吉江門下では、同氏のほか、福原満洲雄氏（前京都大学数理解析研究所長）など若い人たちが微分方程式の研究グループをつくっていた。

また仙台には、第二高等学校卒業後も北海道への往復の途中にほとんど必ず立ち寄った。フリーエ解析の研究者である東北大学の泉信一助教授にはよく御世話になった。同氏のご紹介で、関数論

の研究で令名の高かった清水辰次郎博士にも、東京大学の学生のご指導にあずかった。清水先生は、当時大阪大学数学教室の主任教授になられていた。すぐれた解析学者である清水、南雲、泉三先輩のご指導を同時にいただいたわたくしは希な幸運に恵まれたわけである。「南雲の問題」に対する私の研究は、「線形移動関数方程式とコーシイ級数の理論」としてまとめられ、日本数学集報に発表し、約百ページにのぼる長篇になった。コーシイ級数というのは調和解析の一種の拡張である。

この論文をまとめる過程において、調和解析の勉強のため、わたくしは、のちにサイバネティクスを創設したN・ウィーナーの数多くの論文を精読し、肌身離さずその著書を持っていた。ちょうど折よく、同氏が中国へ渡航の途中、日本に立ち寄られた。昭和十年七月のことで、自分の研究について報告し、ご意見も承った。有名なブラウン運動の確率理論の説明も、上野駅の待合室でお伺いしたのは、今でも印象的である。

しかし、当時わたくしは、近代的な確率論などは知らなかった。東京大学では末綱先生から確率統計を習い、天文学の平山清次先生から最小自乗法を学んだわけだが、さして統計学に関心があつたわけでもなかった。しかし、ソ連、フランスでは当時近代的な確率論が盛んになりかけていた時期でもあったから、新進気鋭の大阪大学解析学グループが、これをなごらく見すごすはずはなかった。事実、吉田耕作（現京都大学教授）、角谷静夫（現エール大学教授）両氏たちと一緒に、セミ

ナールを開いて確率論の勉強を始めたのは昭和十二年のなかば、わたくしの上述の研究もようやく一段落したところである。吉田、角谷両氏のマルコフ過程に関する有名な研究は、かくして生まれた。しかし、わたくしは別の道をたどることになった。

当時、わたくしは、数学の対象は要するに現実のモデルであるという見方をとるようになっていた。当時の風潮である抽象化運動もいまとなってみれば、わたくしにもその意義は理解できる。しかしその当時、わたくしの気持はこれにはあまり納得できなかった。数学の原像をつきとめること、現実の世界、それがたとえいく多の混迷があろうとも、数学者も誰かは、そこへ突き進んでみなければならぬと感じていた。秩序の世界だけでなく、混沌の世界も、探求しなければならぬ。確率論はすでに数学の一分野である。その根源をつきとめなければならぬ。それは統計が与えてくれるであろう。統計学に関心をもち出して、専門学術誌をひもどいてみる。おどろいたことには、なにごないだかさっぱりわからない、聞いたこともない術語と公式のら列である。ここに日本学界の盲点があったのである。

昭和十四年四月、九州大学は、荒川文六総長の努力によって、多年の宿願を達成して理学部を創設することになった。創設委員・寺沢寛一博士の推薦と、おそらくは私の仕事を評価してくれた関数方程式論の福原教授の支持によって、ここに迎えられることにより、大阪大学工学部講師であることわずか四カ月、福原満洲雄、本部均氏（現東京都立大学教授）たちとともに、数学教室創設に

あたることになった。わたくしの担任した講座は応用微分方程式論と数理統計学であった。わたくしは九州大学農学部、医学部、法文学部から、統計学の文献を借りて独学でとりかかった。

わが国の数理統計学は約三十年の遅れがあった。ただ、わたくしたちのところは、古屋茂（現東大教授）、井上正雄（現大阪市大教授）、丸山儀四郎（現東京教育大教授）の諸君など、優秀なかたがたがおられたので、おおいに助かった。

わたくしは、この遅れは放置すべきでないし、わが国の水準を高めるには有志を語って学会をつくり、相協力して、研究を進めるほかはないと思うにいたった。とくに、河田竜夫、増山元三郎（ともに現在カソリック大学教授）の両君の絶大な協力をえた。山内二郎先生（現青山学院大学教授）石田保士氏（東芝）、三留三千男氏（当時在朝鮮、現九州農事試験場）などとお近づきをいたたくようになったのは、このときからである。昭和十五年二月十六日、「統計科学研究会」が発会された。同会は、はじめ邦文誌、のちに欧文誌を発刊して今日にいたっている。

当時、わたくしたちは、非常な熱意をもっていた。統計的品質管理の勉強を始めた当初、わたくしは一週間で一冊の著書を翻訳したことがある。わたくしたちが新しい教室をつくり、新しい学会をつくり、統計学の勉強を始めたそのときには、支那事変はますます拡大していった。食糧難と過労のためわたくしも、妻も、そして二人の娘も、目立ってやせていった。昭和十六年十二月の末、開戦後十日以上もたったころ、わたくしは高熱で病に倒れた。これが、意外の大病となった。

わたしが九州大学第三内科・小野寺直助先生の手厚い保護によって健康をとりもどし、学窓に帰った昭和十九年秋には、戦局は次第に不利に傾き、国内は憂色が濃く、学内も正常な運営ではなかった。学者にとっては平穩静明な光のもとにある学窓がたいせつなことはいうまでもない。しかし、戦中、戦後の逆境もまた学者としてのわたくしになにかを教え反省させてくれたのは確かである。

終戦を疎開地である福岡県吉井町で迎えた九州大学数学教室は、容易に福岡市に帰れなかった。

耳納連山を望む仮寓の二階にたてこもって、わたくしは著述に取り組んだ。国は敗れ、もろもろの既成権威はくずれてゆく。学問だって、その根本に立還って見直してみるべきだ。果たして、それは一生をささげるのに値するだろうか。別に自分の専門だって弁護しなくてもよいのだ。虚像なら早く崩れ去れ。このような不逞ともいうべき自由な気持が、わたくしの心の底にはあった。それはうつろではあるが、なにか澄んだ心持ちでもあった。著述は「統計学の認識」(白揚社刊)という題で、結論は破壊ではなかった。しかもわたくし自身にとっても、統計学研究のための前進基地を用意することにもなった。独学のわたくしも安心して進みうる原点ができた。

戦後の約十年、わたくしは、標本調査では、三井三池炭鉱の生計費調査、農林省統計関係の漁獲量調査、材積量調査などの設計に関与し、品質管理では北九州から宮崎県の諸工場で講義し、実験計画の相談にもあずかった。すでに多数の統計学者が健在であり、統計学が普及した今日とは異な

り、当時のわたくしどもには、いろいろの負担がおしかぶさってきた。しかし、実相をまず見た上でこそ、理論の適否もわかるのではないか。理論の大きな修正も、あるいは変革も、そこから生まれるかも知れない。こうした考えが私の心のなかには深く根をおろしていた。こんな考え方は数学者の考え方からははずれている。もはや自分ももう数学者とはいえないかもしれない。

その結果、数学者としてわたくしがどういふ運命におちいつて行くか。その当時のわたくしの気持では、数学者としての運命などは顧みるいとまもなかった。しかし海に山に工場に、足にものをいわせる遍歴と活動とがもたらしたものは、結局は統計学に対するある見解と方法への凝晶作用であったから、なにがしかの理論とはなった。昭和二十五年から昭和三十五年へかけて発表された、「推測過程論」とこれにつづく「制御過程論」というのがそれである。

思えば、「統計学の認識」で著者であるわたくしが到達しえた一つの帰結は、理論のうらには、必ずや実体があり、これを追究し、明確に把えることによって今後の進展を正しく方向づけうるということであった。このような思考態度で検討した結果として得た結論は、統計学の認識は、推測過程として理解されるべきである。さらにその根底において、推測と制御とは相補的でもあるということであった。

昭和三十五年、東京で国際統計協会の総会があったとき、招待講演でこのような見地から「統計学のサイバネティックス的な構成」ということを指摘している。この指摘は、情報科学に没頭して

いる現在のわたくしにとってはあたかも現在のわたくしを予感しているかのようであり、われながら、将来を予告したようで、感慨深いのである。

話は前後するが、この間、わたくしもしばしば外遊の機会に恵まれ、多数の外国の専門学者たちと親しくなるようになった。

昭和二十八年四月から八月まで、インド統計研究所の客員教授としてカルカッタで暮した。所長 P・C・マハラノビス教授は、多年、標本調査の実績をつまめた先駆者であるが、数多くの未解決の理論的課題を持たれている。同教授の提示された問題の研究に没頭すること炎暑のもとで三カ月。帰国にさいし、成果は「標本調査設計論への寄与」として先生にお届けした。のち公刊されている。昭和三十年六月、国際統計協会総会に出席して初めて R・A・フィッシャー教授とご面識をえた。ところはブラジル国リオ市の郊外においてである。このあと、米国アイオワ州立大学統計教室に客員教授となり、同年九月から十二月まで勤めることになった。この大学はいまでも私を同窓会員として扱ってくれる。翌年には、フィッシャー教授の発議による推薦で、国際統計協会正会員になった。昭和三十三年一月、カルカッタ大学百年祭を記念して、英国歴史学者トインビー、米国の物理学者 オペンハイマーとともに私は名誉学位を与えられた。

しかし、わたくしの仕事は、荒削りで、欠陥も多いし、未完成であり、恥ずかしいことが多い。だが、わたくし自身は、それらにも顧みることなく、何か過去の仕事の修正にかまっておれない気

持である。それは決してよいことだとは自分でも思わない。しかしゆっくり安住しえない気持は、自分ではどうにもならない。あるいは宿命的なのかも知れない。

故フィッシャー教授には生前数回お会いしたが、そのつど、いつも今は何をやっているかという質問が必ず出る。わたくしの仕事をいつも気にしていただいたことをいまでもありがたく思っている。マハラノビス教授は現在なお健在である。祖国インドの経済発展のため数次にわたる五カ年計画の草案をつくったし、標本調査、多変量解析でも大きな仕事を残している。統計学をわたくしに教えてくれたかたは、母国の先輩にはおられなかったが、近代の統計学の歴史に残るこの二人の巨匠に親しく指導を受けることができたことは、容易には得がたい幸運であった。そう機会が数多かつたわけでもないが、いちいちはっきり思い浮べられる。学問については本当に火花の飛び散るような言葉の受け答えであった。

ただ先生たちの期待したような方向にいま自分が進んでいるか、それは心もとない。学問の歩みは、ときに先生とも友だちとも離れて、ひとり荒野にさまようことを要求する。わたくしは、雪国の吹雪の夜に道迷う旅人のあわれさをいつも思い出さずにはおれないのである。

(四)

学究としてのわたくしの既往をふり返ってみると、昭和二十六年以来通算十七年にわたる日本学術会議の会員としての活動をあげないわけにゆかない。科学者の意向をとりまとめ、政府に要望し

たり、広く社会に声明を發表する。政府の諮問にこたえて、科学行政について意見を答申する。このような機能を果たす機関は、戦前には、わが国には存在しなかった。全国十数万の有権者の直接選挙によって、会員二百十名が選ばれるという制度も、現在でもこの国にも類例がないようである。

外国の友人は、わたくしのこの活動を異様に思い、時間つぶしだろうというのである。事実、科学を行政に反映させるという会員の任務からいっても、会員の活動、発言が科学行政の政治的なことに当然関連する。科学者の一部のかたが貴重な研究時間をさいて、研究の環境を整備するために活動することは、日本においては現状ではどうしても必要である。しかし、それが本人の研究そのものに直接プラスになるとは、とうてい考えられそうもない。だが、わたくし自身についていえば、必ずしもそうではなかった。ありていにいえば、日本学術会議はわたくしにとっては年四十二歳になつて入学したある種の学校ないしは研究所のようなおもむきもないではない。ここで多くのこと、特に次の三つのことを学んだように思うのである。

第一に、すべての学問分野にわたる二百十名の会員が一堂に集まって、議論をたたかわす總會。科学者の社会的な使命ということを力説される先輩の発言が具体的な論議を通じて、ひしひしとして胸に迫る。文・法・経・理・農・工・医の七部構成である学術会議で、学者というものが、その専門分野によってどんなに物の見方が異なるか、論理の展開に、関心のおき方にかくも違いがあるかを、まざまざと教えられた。碩(せき)学大家の学説は、著書によって学ぶことはできる。

しかし、これほど多数の方から親しく、ご意見をお聞きするということは、学術会議のほかでは容易にできることではないように思われる。

第二に、わたくしは学術会議では、調査と立案との委員会作業に一貫して従事してきたが、これがわたくしにとっては、科学計画論という計画論の一分野を開拓する機縁を与えた。わたくしは、昭和二十九年一月、総会提案を發議し、長期研究計画調査委員会の設置を実現することができた。

科学研究の長期計画の立案、作成は科学者自らの手によってなされるべきである。学術会議は学界の総意を基盤として、各分野の要望をとりまとめ、これらを総合して体系づけなければならぬ。趣意はこのように明確なのであるが、わが国には先例がなく、もとより実際これをどうして実行するのか、依るべき計画方法論も世界のどこにもなかったのである。わたくしどもが実に約十二年の年月の努力ののちにおいて、ようやくとりまとめることができたのが、「科学研究第一次五カ年計画」である。これは昭和四十年十月総会の決議として、政府にすでに勧告済みである。

すでに述べたように、統計学におけるわたくしの恩師の一人、インド統計研究所長 P・C・マハラノビス教授は、インド経済開発の数次にわたる五カ年計画の原案作成者である。わたくしは調査論から計画論への前進について、先生から実物教育を受けたように思う。しかし、先生よりはほんの一步さきに科学計画論という未開拓の分野に着目しえたのも、わたくしが日本学術会議にいたからであったと思う。

第三に、数多くの科学分野において、現在どういう研究計画があるのかを具体的に知ることができたのも、日本学術会議においてである。上記委員会幹事として、個別計画の数多くを拝聴し勉強する役目をお任せされたからである。各分野とも、自由に立案し、互に無関係に計画したものを、とりまとめ総合するという仕事に従事すること、すでに今日まで十年以上になっている。ここで学びえたことは、このような個別計画の内容を要素的に分解してみると、共通の類型があるということと、科学分類を固定的に考えるべきでないということであった。わたくしが基幹科学とか総合工学という考え方を、近年あらわに表明し、その意義を強調するようになったのは、こうした下積み
の労苦から得た見解であった、とわたくし自身は思っている。

さらに進んで、わたくしが情報科学を基幹科学の一つとして位置づけ、材料・エネルギー・情報という三つの視点からの基礎工学の構成を意図するようになったのも、その機縁はこうしたところ
にあったといえる。

こうしてみると、少なくとも三つの点からいって、日本学術会議の会員としての活動が、わたくしの学究としての歩みに大きく影響したことを、自分自身は認めないわけにはゆかない。ただ申すまでもなく、これは副産物としてえられた結果がそうなったということである。科学研究の長期計画案をつくること、そしてそれが実現することが、唯一の目的として進んだことはいうまでもない。この目的は、まだ達成されていないが、科学行政の現在の混乱にもかかわらず、大局においては、

わたくしはきわめて楽天的である。これから実現のための政治折衝には自ら適任の方もあろう。わたくしとしては、山積する資料を早く整理しておきたい。学究としてのわたくしには、積年の努力が、学問的にどんな射影を、わたくしの学問の道に投げ与えているかを、凝視しないわけにはゆかない。

(五)

わたくしは現在、情報科学のために六十数巻にのぼる講座を編集し、学術会議では情報科学小委員会の世話にあたり、大型計算機設置の将来計画の検討、確立に努力した。九州大学では昭和四十四年一月五日よりサービスを開始する大型計算機センターの開設準備にあたっている。また基礎情報学研究施設長の職にもある。解析学、確率論、統計学、そして計画数学というふうに進んできたわたくしが、どうしてこのように集中的に情報科学というものに取り組むようになったのであろうか。いまその理由を自分でふりかえってみよう。

第一に、数学者としてのわたくしの原型がこういうところにあった。出発点の解析学のなかで、わたくしがもっとも関心を持った作用素論にしても一般調和解析にしても、情報科学の原型であるサイバネティックスのN・ウィナーの数学的な構成にきわめて近接したところにあった。確率論においても同じような事情にある。

第二に、統計学の理論的探求が情報科学への道を用意した。統計学の研究・調査に熱中したところ

は、数学から大きく離れたときであった。

わたくしはR・A・フィッシャーの築いた推測統計学をひたすら追究した。数学出身のわたくしなどは、理論の整備ということは究極の関心事にどうしてもなる。標本調査、品質管理にそして標本調査に、実地の応用をはかってきたわたくしは、フィッシャー、ネイマン、ワルトたちの理論体系に、まだ十分でないものがあるのに気づかないわけにゆかなかった。

すでに述べたように、推測過程論と制御過程論とを、盾の両面のように接着した姿において展開することになった。この方面の考察は、統計的認識がいかにして形成されてゆくか、その道筋をたどることを、当然問題にするから、「経験によって学ぶ」という学習過程に当然論究しないわけにはゆかない。演繹、帰納の論理だけでも必ずしも十分でない。相互規定の相対論理ということも、認識の基底にある。演繹と帰納との二つの区別にだけかかわってはおれない。このようにして、わたくしもウィーナーの晩年の関心事であり、サイバネティックスの中心課題となった学習とかシステム論へ、期せずして入っていった。

第三にあげるべきことは、昭和二十六年以来の図書館長という仕事もたらした機縁である。九州大学では評議員会においてどの学部にも属しない立場から発言すべき役目がないせつだし、仕事はそう忙しくないはずだといふので、うっかり勧めにのつたのは、しろうとの無知によるものであった。

大学図書館には、あまりにも多くの問題が残されていた。わたくしは、イロハから図書館の勉強を始めた。専門の学会に出る外国出張の機会を利用して、アメリカの有名な大学図書館、スイス、フランス、イギリス、オランダの大学図書館を見学した。また文部省の専門委員会にも委員として参加し、図書館施設改善案の作成にもあたった。いろいろの試論も書いてみた。

そのような仕事のちにおいて、昭和三十九年十月には「大学図書館の近代化について」という勧告を、日本学術会議でとりまとめ、政府へ提出した。その内容の核心となったのは、情報科学の振興による近代化ということであった。故岸本英夫（東京大学、宗教学）伊藤四十二（当時東京大学、薬学）、金谷治（東北大学、中国哲学）らの諸氏とお知合いいただいたのも、図書館の仕事の関係からであり、大塚明郎博士（物理学）、小谷正雄教授（物理学）らとはドキュメンションのことでさらに親しくなった。

第四にあげるべきことは、計算機の発達をもたらす影響に関連している。わたくしは全国の計算機専門のかたがたの意見を伺い、全国共同利用の大型計算機の設置を学術会議において要望する提案を行ない、それは東京大学において実現を見たが、さらに全国にわたる第一次五カ年設置計画をも立案した。京都大学、東北大学ならびに九州大学において昭和四十四年一月より全国共同利用のサービス開始の運びになっている。

わたくしたち関係委員は、計算機の進歩にそって計算機利用の量的増大ばかりでなく質的向上を

めざしている。既発表の計画の全面的な実施を強く要望するとともに、新しい計画の作成も考慮しつつある。この仕事の関係で、大学所属の計算機専門家の多数のかたがたと知り合うようになった。第五には、九州大学内部におけるいくつかの研究グループの存在が利いている。わたくしの属する数学教室は、計算、統計、計画の三講座をもち、全国的に特色のある教室である。工学部には、自動翻訳、オートマトン、数理言語学、学習理論で高い水準をもつ有能活発なグループのいることは周知の通りである。理学部および医学部における生理学の研究も有名である。わたくしは、こうした人たちといく度となく会合し共通の研究課題について語り合った。情報科学という名称もこのグループにおける討議から生まれ、情報科学総合研究機構の構想もここで生まれた。桑原万寿太郎（理）、清水浩（工）、大野克郎（工）、栗原俊彦（工）、問田道幹（医）、故大森恭介（農）の諸教授に特にいろいろご協力をいただいた。

現在わたくしは理学部で計画数学の講座をもつとともに基礎情報学研究施設長をかねている。わたくしの研究室に学んだ数多くの若いかたがたが、全国各地で活躍しているのはこの上なくうれしい。ただ、各自それぞれ違った道があろう。わたくし自身も、いままでそうであったように、これからの未知の世界への探求がくりかえされることであらう。「海へ乗り行く者」わたくしはいつも故郷の暗く荒い北の海を思い浮べるのである。

発表の年月

- 一 P・C・マハラノビス
 二 R・A・フィッシャー
 三 G・スネデカーの使徒
 四 プリンストンの友
 S・ウイルクスの思い出
 J・トゥキイとデータ解析論
 五 N・ウイナー
 若き獅子たち
 R・ベルマンと数理科学
 G・ポツクスと適応制御
 七 あの山、この川
 海外での遊と学
 羅生門
 科学の進歩と人類の幸福
 レニングラードの友
 わが歩み
 統計学と私
 わが歩み
- 数学セミナー 一九六五年十一月号・十二月号（統計学者の肖像1・2）
 数学セミナー 一九六六年三月号・四月号（統計学者の肖像3・4）
 未発表（一九五六年ごろ執筆）
- 数理科学 一九六四年七月号
 数学セミナー 一九六七年三月号（統計学者の肖像10）
 数学セミナー 一九六六年六月号・七月号（統計学者の肖像5・6）
 数学セミナー 一九六六年九月号（統計学者の肖像7）
 数学セミナー 一九六六年十二月号・一九六七年一月号（統計学者の肖像8・9）
- 潮 一九六七年九月号
 人間専科 一九六〇年二月号
 教育と医学 一九六二年一月号（第十卷第一号）特集Ⅱ人間の幸福
 数学 一九六七年一月号（第十九卷一号）
- 九州大学学友会「展望」創刊号 一九五七年七月
 科学新聞 一九六八年六月二十一日・二十八日、七月五日・十二日・十九日に
 連載